

水害はいかに語られるか

—栃木県足利市におけるカスリーン台風を事例にして—

法政大学キャリアデザイン学部教授 田澤 実

1 はじめに

(1) 本研究の目的

本研究の目的は、水害がいかに語られるかについて明らかにすることである。具体的には、栃木県足利市におけるカスリーン台風¹⁾の体験者証言の計量テキスト分析を行うことにより、体験者の災害イメージを明らかにする。

(2) 本研究の構成

つづく第2節では、足利市におけるカスリーン台風の被害状況を概観し、第3節では計量テキスト分析に用いた資料の特徴について述べる。第4節で計量テキスト分析の結果を述べ、第5節ではまとめを行う。

2 足利市におけるカスリーン台風

(1) カスリーン台風による1都5県の被害状況

昭和22年(1947年)9月に発生したカスリーン台風は、1都5県(群馬、埼玉、栃木、茨城、千葉、東京)において、死者1,100人、家屋浸水303,160戸の甚大な被害をもたらした(表1)。実数のみで比較をすれば、東京都において床上浸水(72,945戸)が多く、群馬県において死者(592人)が多く、埼玉県において田畑の浸水(66,524ha)、傷者(1,394人)が多いのに対して、栃木県においては、家屋流出・倒壊(2,417戸)および家屋半壊(3,500戸)が多い。

表1 カスリーン台風による1都5県の被害状況

都県名	家屋の浸水(戸)		家屋流出・倒壊(戸)	家屋半壊(戸)	死者(人)	傷者(人)	田畑の浸水(ha)
	床上	床下					
東京	72,945	15,485	56		8	138	2,349
千葉	263	654		6	4		2,010
埼玉	44,610	34,334	1,118	2,116	86	1,394	66,524
群馬	31,091	39,938	1,936	1,948	592	315	62,300
茨城	10,482	7,716	209	75	58	23	19,204
栃木	45,642		2,417	3,500	352	550	24,402
合計	303,160		5,736	7,645	1,100	2,420	176,789

(出所) 国土交通省関東地方整備局 HP『カスリーン台風の被害』を参考に筆者作成。

(2) カスリーン台風による足利市の被害状況

足利地区の決壊の中で、最も激甚な被災をもたらしたのは渡良瀬左岸岩井山に取り付く十念寺堤防の決壊であった(内閣府, 2010)。昭和22年(1947年)9月15日、午後8時頃、足利市内の十念寺堤防が約200m決壊し、氾濫した濁流が多くの家屋を押し流した(茨城新聞社ら, 1997)。足利市の被害状況は、死者252人、行方不明者67人、家屋の流出372戸、家屋の全壊328戸、家屋の半壊257戸、床上浸水11,976戸、床下浸水5,773戸であった(足利市総務部広報課, 2017)。²⁾

(3) 足利市における災禍の記憶の継承

かつての十念寺堤防の決壊地点付近には、現在、カスリーン台風犠牲者の供養のための地蔵堂、五輪塔、シンボルタワーおよび自然災害伝承碑がある(図1)。これらの所在地と十念寺堤防の決壊地点について図2に示す。

①地蔵堂、五輪塔³⁾

地蔵堂は、台風被害の翌年に地元の企業経営者であった小林忠蔵氏(小林機械製作所社長)が犠牲者の供養を願って、かつて自社の工場敷地の一角に建立したものであり、五輪塔は、昭和28年に地元の仏導会の手で建てられたものである。平成11年に足利警察署の新庁舎が建設されることに伴い、足利市岩井町の堤防上に移設された。毎

年この堤防上では、遺族、僧侶およびボランティアらによる供養が続けられている。

②シンボルタワー「清流わたらせ21」

カスリーン台風による災禍を21世紀に継承し、「渡良瀬川とそこにすむ人々がひとつになった水害のない明るい未来」への願いを込め、高さ4.5mのシンボルタワー「清流わたらせ21」が平成12年に建てられた(国土交通省関東地方整備局渡良瀬川河川事務所, 2015)。

③自然災害伝承碑

シンボルタワー「清流わたらせ21」と共に、水害犠牲者の氏名を記した石碑が平成12年に建てられた(国土交通省関東地方整備局渡良瀬川河川事務所, 2015)。これは、現在、足利市の自然災害伝承碑「渡良瀬川と共に」として登録されている。自然災害伝承碑とは「過去に起きた自然災害に関する『発生日月日、災害の種類や範囲、被害の内容や規模』を伝える恒久的な石碑やモニュメント」であり、治水事業の完成碑、自然災害とは直接関係がない殉職者の慰霊碑および事故の鎮魂碑は自然災害伝承碑から除外される(国土地理院, 2019)。自然災害伝承碑に関する情報は、2019年6月より国土地理院のウェブ地図「地理院地図」に掲載されており、2021年2月現在で、47都道府県236市区町村741基が公開されてい



図1 足利市の地蔵堂、五輪塔、シンボルタワーおよび自然災害伝承碑「渡良瀬川と共に」

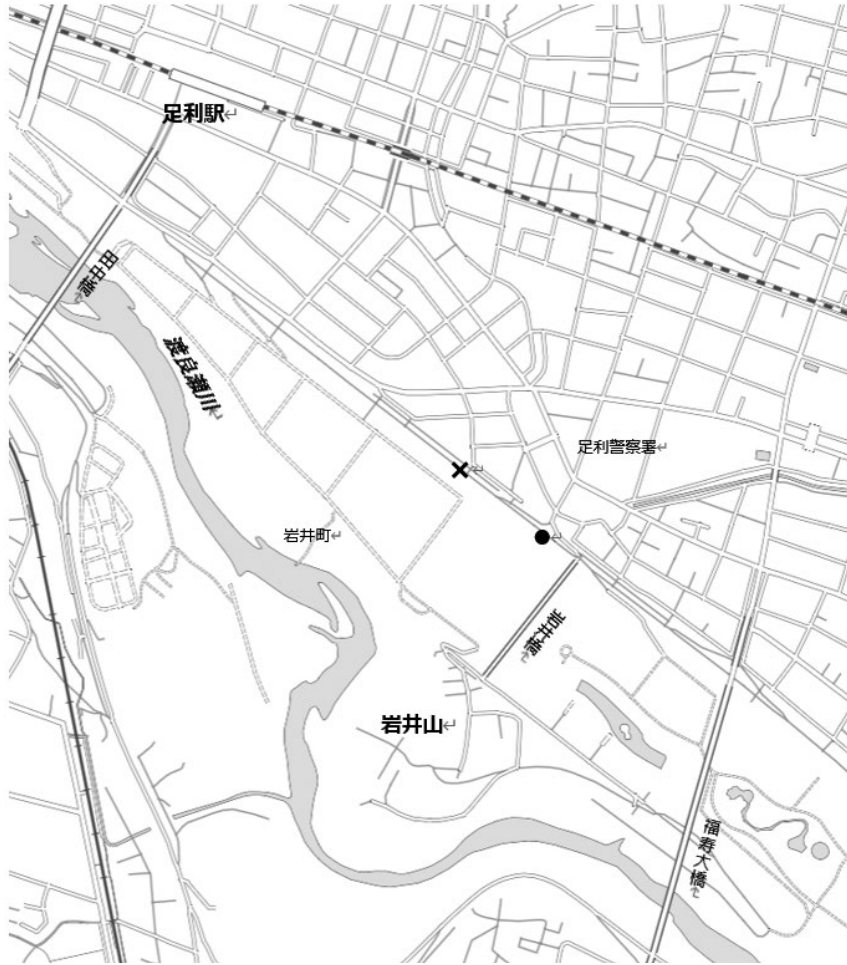


図2 周辺地図

注1. ●・・・地藏堂、五輪塔、清流わたらせ21および自然災害伝承碑の所在地
 注2. ×・・・十念寺堤の決壊地点

る⁴⁾。なお、この自然災害伝承碑の付近には、「決して忘れてはならないカスリーン台風」という案内板が設置されており、カスリーン台風の発生年月日、被害の概要などが記されている。

3 災害イメージの先行研究

本研究では、永田・矢守（1996）を主要な先行研究と位置づける。本節では、分析の視点として永田ら（1996）の概要を紹介する。

永田ら（1996）は、災害イメージの形成過程

を現場性の程度に依拠して整理・分類することが有力なアプローチであることを指摘した。

(1) 「知覚現場的判断」と「概念思考的判断」

まず、永田ら（1996）は、災害イメージを、「知覚現場的判断」と「概念思考的判断」に分類した。両者の違いについて、永田ら（1996）は夜景の判断を例にして次のように説明する。

前者は「この夜景はきれいだ」のように、時空的に定位できる具体的対象についての判断であり、知覚現場を経験していない者には、この判断

が端的に不可能である。それに対して、後者は「夜景（というものはきれいだ）」のように、個々の夜景の特殊性を捨象した判断であり、その内包的意味に即して「きれいだ」という述定がなされている。どちらも「夜景はきれいだ」と言及している例であるが、現場性の程度が異なることが分かる。永田ら（1996）は前者が災害イメージの「事象化」に、後者が災害イメージの「事態化」に対応するとした。

(2) 「具象名詞」と「抽象名詞」

そして、永田ら（1996）は、事象と事態の相違が、災害について語る際に用いられる名詞の違いに反映されるとして、「具象名詞」と「抽象名詞」に分類した（表2）。永田ら（1996）によれば、前者は現前する災害の具体的な内実を明確にしようとするため、「石ころ」「木の根っこ」などの具体的な物質であるような名詞が相対的に多用されるのに対して、後者は抽象的概念としての災害の意味的規定性に焦点が当てられるため、「大水害」「土砂崩れ」などの災害の下位概念にあたる名詞が相対的に多用される。実際に、永田ら（1996）は、

自治会の会話で「具象名詞」が多く使われるのに対し、行政の会話で「抽象名詞」が多く使われることを示し、自治会の災害イメージが事象的であるのに対して、行政のそれが事態的であることを示唆した。

(3) 「事象化」と「事態化」の双方からみえること

最後に、永田ら（1996）は、「事象化」した災害イメージと「事態化」した災害イメージを連動させることが、防災意識の維持、高揚に必要であると結論づけた。このことを「事象－事態連動型の災害イメージ」と呼んだ。

上述してきたように、「事象化」した災害イメージは、時空的に定位できる具体的対象についての判断であるため、知覚現場を経験していない者には、この判断が端的に不可能である。さらに、永田ら（1996）は、自治会のメンバーが「事象化」した災害イメージを共有する同士の会話において、その生々しさを掬いとる努力を放棄してしまうような抽象的言説に対して、非常に批判的であることを明らかにした。永田ら（1996）が例で

表2 具象名詞と抽象名詞

多用される名詞	災害イメージ	特徴	名詞の例	発話例
具象名詞	事象化	<ul style="list-style-type: none"> ・知覚的・表象的に現前する災害の具体的な内実を明確化しようとする ・その指示する対象が素朴な意味で具体的な物質であるような名詞が相対的に多用される 	石ころ、石、岩、木の根っこ、枯れ枝、枯れ木、泥水、泥	「あそこにあの、こんど木の根っこのはさまってたでしょう……それにこんな木の根っこがはまって、あの杉なんかの枯れ枝が流れてきよって」
抽象名詞	事態化	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的概念である災害の意味的規定性を明晰判明化しようとする ・災害を含意する名詞（災害の下位概念にあたる名詞）が相対的に多用される 	大水害、水害、自然災害、災害、土砂崩れ、土石流、斜面崩壊、洪水、氾濫、浸水、濁流	「密集して建ってますんで……土砂崩れですとか、土石流とか、それ以外に今度は火災なんか危険なわけなんですね。」

（出所）永田・矢守（1996）を参考に筆者作成。

示した自治会メンバーの発言を下記に示す。

「あのイソ山の上から流れてくる水が、近頃は雲仙岳の言葉が流行ってさ、土石流が流れてきてる、ほんなこというわけさ。そして行ったら、なるほど石ころいっぱい流れてきてたよ」「何でも流れてくるのは土石流と思ってるのじゃないですか」(笑) (永田・矢守, 1996 p208)

このように、永田ら (1996) は、「事象化」した災害イメージの場合、災害を直接体験していない次世代の人々に伝達することが非常に困難となる可能性があり、逆に、「事態化」した災害イメージは、抽象的概念に立脚しているため、広範な人々にとって了解可能なメッセージとなりうるとしている。

一方で、永田ら (1996) は、「事態化」した災害イメージにも欠点があることを指摘する。すなわち、個々の事例の特殊性が捨象されてしまう可能性が高いため、「防災意識の拡充につとめましよう」云々といった文言が、いわば硬直化してしまうことである。

そこで、永田ら (1996) は、「事象－事態連動型の災害イメージ」の必要性を提起した。それは「事象・事態両者のメリットを巧妙に組み合わせた形で災害イメージを形成 (永田・矢守, 1996 p214)」することである。そのひとつの方法として、永田ら (1996) は、他の多くの災害事例について語ることに注目している。たとえば、永田ら (1996) は、下記のような長崎大水害を他の水害と比較して語る発話を紹介している。

「鹿児島は長崎水害の教訓を何一つ……研究してないの。病院がね、やっぱ地下室やられたんですよ、浸水してね……長崎のだから教訓ってのは、ほとんど伝わってないのか、それとも不勉強であったのか、これは鹿児島の人が問われるべきだと。行政も住民もさ、鹿児島市民も一体何をしとったんだろう、長崎

からあの人たちは何も学んでないじゃないか……偉そうに言ったけど長崎もさ、現実には同じだな」(永田・矢守, 1996 p207)

このことについて、永田・矢守 (1996) は、「一方では、長崎大水害を事態化することで広範な人々に了解可能なメッセージを形成し、他方では、他の災害事例を事象化しそれを事態の体系にリンクさせることで、事態の体系を常に活性化・新鮮化している (永田・矢守, 1996 p214)」と説明している。

4 データの概要

(1) 本研究で用いる資料

本研究では、建設省渡良瀬川工事事務所による『カスリーン災害記録集Ⅱ カスリーンが語るもの聞き取り調査・体験談集』(以下、同資料と表記)を分析の対象とした。同資料はカスリーン台風から約50年後に該当する1998年の発行である。以下において、同資料より引用する際には、読みやすさを考慮し、部分的に句読点の追加および原文の漢字や仮名の一部に修正をしている。

同資料は、聞き取り調査と体験談集の2部構成である。聞き取り対象者は合計49名、体験談提供者は合計40名であり、どちらも地区の内訳として足利市が多くを占める。

聞き取り調査は、主にQ&Aの形式であり、各質問に対して短文で回答をまとめている。それに対して、体験談集は、特に定まった形式はなく、分量に個人差はあるが、一人あたり数ページ以内の分量で、まとまった文章として記載されている。この体験談集の作成手続きの詳細については同資料に記載がないが、「先般、回覧板にて周知のあったキャサリン台風について、どんなことでも良いとお知らせに基づいて体験を記述してみました (p114)」とあるので、自らが体験したカスリーン台風についての自由記述が用いられていることが予想される。ただし、40名の体験談提供者のうち、7名の提供者の話については、1人

が編集した旨が書かれている。これらについては編集者が各提供者の話を聞き取ってまとめたと思われる。以上より、同資料の体験談集は、体験者が「書いた」データと「話した」データの両方が含まれていると思われる。

(2) データとしての位置づけ

永田ら(1996)によれば、災害について語ることは、単に何らかの音声を口に出すということではなく、「さまざまな契機に即して、その他の存在・出来事との示差的区別を明確化する営み(永田・矢守, 1996 p217)」であるとしている。同資料の「はじめに」には、「人々の記憶を辿ることで惨禍を思い起こし、次の世代に引き継ぐとともに、洪水等の災害に対する戒めと新たな心構えとしたい」と書かれている。本研究で扱う体験談集も同様の営みを有していると判断できるであろう。よって、本研究ではこのデータをカスリーン台風という水害についての語りと位置づける。

5 計量テキスト分析

本研究では、同資料の中から足利市地区の体験談提供者のデータを用いることにした。計量テキスト分析をするために、同資料から該当箇所のデータをテキスト化した。分析の際には、部分的に句読点の追加をし、原文の漢字や仮名の一部に修正をした。テキスト化したデータは約43,200文字であった。以降ではこのデータを「全体データ」と呼ぶことにする。なお、分析には、特に断りのない限り、計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア「KH Coder」(樋口, 2004)を利用している。

(1) 全体データの分析

まず、全体データにどのような内容の記述が多くみられたのかについて概観するために、データ中に多く出現していた語を抽出した(表3)。上位100語を目安にしたところ、出現回数が14回の語までを採用して上位100語となった。なお、

助詞や助動詞のようにどのような文の中にも出現する一般的な語を省き、データの内容をあらわすような語に注目し、活用のある語は基本形に直して取り出した。出現回数が最も多かったのは「水(164回)」であり、次いで、「家(145回)」「流れる(68回)」「堤防(66回)」「人(65回)」であった。

上述したように、永田ら(1996)は、災害イメージを「事象化」と「事態化」に分類し、人々が災害イメージを共有する際には、前者が災害の知覚現場を基盤にしており、後者が抽象的な概念体系に依拠する可能性があることを指摘した。本研究における上位語には、第3節で示した「抽象名詞」の語として、「濁流(55回)」「水害(45回)」「浸水(27回)」が含まれていた。また、「具象名詞」の語は含まれていなかったものの、類似の語として「木(19回)」が含まれていた。本研究では、「木の根っこ」「枯れ木」といった記述はなかったものの、「途中、木につかまり奇跡的に助かりました」「自宅の裏に木が生えていたので、そこにひっきり止まり家の崩壊をまぬがれた」のように、知覚的・表象的に現前する災害を明確化する際に用いられる具体的な物質であるような名詞として用いられているとも判断できる例も含まれた。

次に、どの語とどの語とがデータの中で結びついていたのか確認するために共起ネットワークを作成した(図3)。図中には、グループ分けに対応する丸数字と太めの点線による仕切りを施した。互いに結びついている語のグループから、データ中に多く出現していた主題を探索すると以下のような内容が多いことが分かる。

①②および⑩のグループには、水害に関連した語が集まっていた。具体的には、「濁流」「増水」「決壊」「水位」「浸水」などである。これらの語を含む具体的な記述としては「濁流が音を立てて勢いよく流れている所を」「風雨が強くなり川が増水し始め」「渡良瀬川の堤防が決壊した」「刻々高くなる水位に脅え」「床上まで浸水しているとのこと」などがあつた。最も使用頻度が多かった「水」を含む具体的な記述にも「水が押し寄せてきた」「水が軒先まで来た」のように水害に関連する表

表3 全体データの頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
水	164	道路	35	時間	21	戻る	17
家	145	川	34	父	21	家屋	16
流れる	68	当時	34	方面	21	妻	16
堤防	66	今	33	夜	21	自宅	16
人	65	被害	33	過ぎる	20	助かる	16
見る	62	土手	32	帰る	20	上がる	16
思う	59	音	29	手	20	畳	16
濁流	55	足利	29	早い	20	生活	16
流す	50	自分	27	記憶	19	線路	16
避難	46	浸水	27	工場	19	引く	15
来る	46	水位	27	状態	19	河川	15
水害	45	地区	27	木	19	急ぐ	15
年	45	入る	27	強い	18	死体	15
台風	44	話	27	言う	18	消防	15
前	43	午後	26	続く	18	状況	15
家族	40	聞く	26	着く	18	先	15
屋根	37	高い	25	裏	18	分かる	15
出る	37	増水	24	流れ	18	流出	15
渡良瀬川	37	桐生	23	遺体	17	床	14
決壊	36	近く	23	近所	17	人達	14
月	36	子供	23	兄	17	生家	14
雨	35	母	23	降る	17	増す	14
現在	35	床上	22	声	17	掘込	14
行く	35	一緒	21	大変	17	目	14
昭和	35	下	21	宅	17	両毛線	14

注1. 永田ら（1996）による具象名詞に関連した語に外枠を、抽象名詞の語に網掛けを施した

現が多くみられた。

③および④の部分には、避難行動に関連した語が集まっていた。「すでに近所の数家族が避難して来ており」というように平面的な移動と思われる記述もあれば、「かや葺屋根を破って出て来たお母さん」というように、差し迫る水から逃げるために屋根まで垂直に移動する記述もみられた。特に後者は被害の甚大さを物語る。

⑥および⑨の部分には、日時の特定に関連した語が集まっていた。「それは午後8時を過ぎた頃であったろうか」「昭和22年9月15日カスリー

ン台風の襲来によって」などの記述があった。

⑦の部分に「水害」の語が含まれていた。「次々に水害の被害状況が分かってきた」「水害被害の生活から幾分でも心に落ち着きが出てきました」の記述にあるように「被害」とセットで語られていることもあれば、「毎年の水害を経験してきた」「未曾有の水害となる」の記述のようにカスリーン台風以外の水による災害との比較として用いられていることもあった。語の意味合い的には「水害」は水による災害の総称であり、⑩の部分の語である「浸水」は水害の下位概念である。①②お

よび⑩の部分に含まれていた「決壊」「浸水」などの語と比較すれば、より抽象的な表現が多いといえるかもしれない。

上記までの結果を解釈すれば、カスリーン台風という水害についての語りは、災害の知覚現場を直接体験していない人に対して伝達可能なものにするために、「事態的」な災害イメージを基盤としているといえるだろう。

(2) 直接体験データの分析

上記までの結果は、カスリーン台風の体験談全体を分析の対象とした場合である。そこで、以下

に示すような詳細な分析を行うことにした。

①直接体験データの作成

第一に、カスリーン台風の体験談全体から、災害に直接言及していると思なせる一文を抜き出した。永田ら(1996)は、災害に直接言及していると思なせる名詞を抜き出したが、本研究では以降で行う分析との関連もあり、災害に直接言及していると思なせる文をひとつの単位として抜き出した。

なお、永田ら(1996)は、眼前の物的対象と直接的な対応をもつ名詞を「具象名詞」、対応を

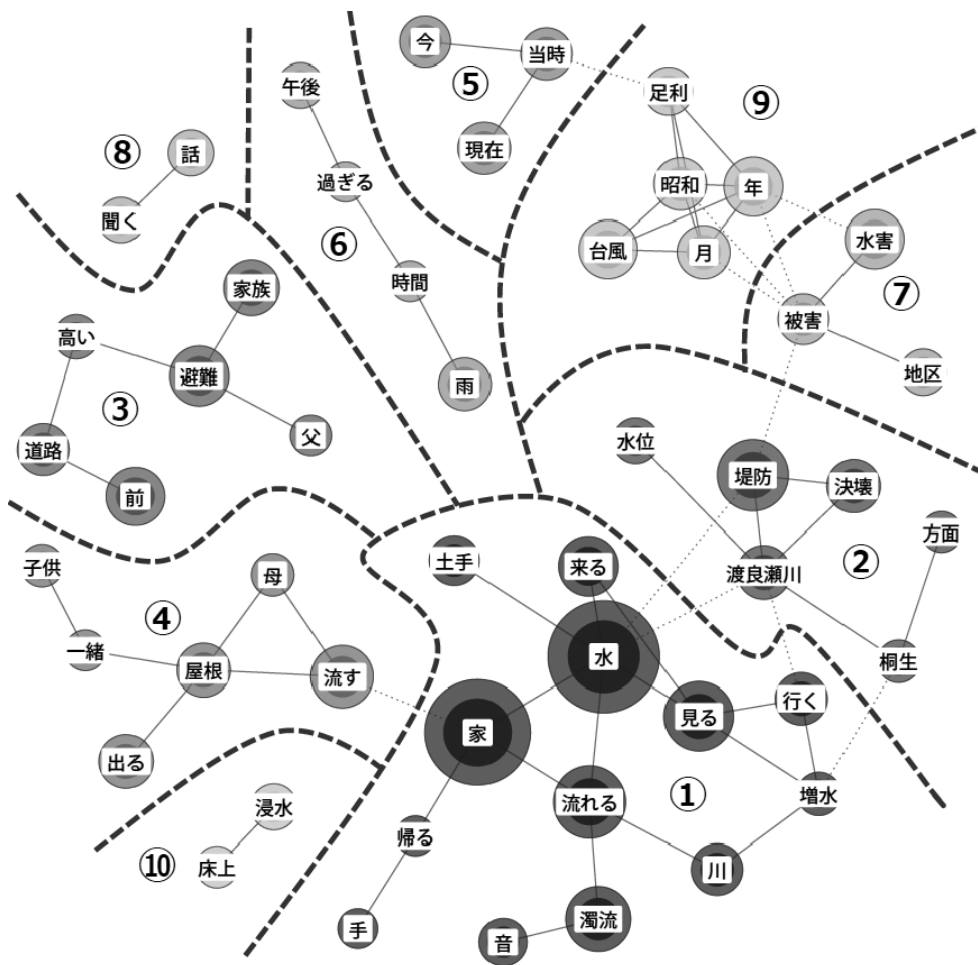


図3 全体データの共起ネットワーク

注1. グループ分けに対応する丸数字と太めの点線による仕切りを施した

もたない名詞を「抽象名詞」として分類したことから、本研究では、体験者が直接体験したと判断できる箇所注目することにした。具体的には、以下の3つのいずれかの特徴がある場合は分析の対象から除外した。まず、伝聞や類推と判断できる箇所である。記述例としては「上屋に避難したそうです」や「堤防が切れた様でした」などが該当する。次に、事後に知った箇所である。記述例としては「堤防は大決壊には至らず、その前に各地区の堤防が決壊し、甚大な被害があったことを知りました」などが該当する。最後に予測に関連した箇所である。記述例としては「私は全部家が流失するのではないかと思い、全員に一家族ごとに輪になり、手を離さないで下さいと申し上げました」である。これらの手続きを経たデータを以下には「直接体験データ」と呼ぶ。総文字数は約10,300文字であった。全体データの約25%に該当する。

②物的対象のカウント

第二に、直接体験データから、カスリーン台風による水害で流れてきた物的対象の数をカウント

した。この分析のみ、KH Coderではなく筆者自身が機械的に数え上げた。先述のように、永田ら(1996)による「具象名詞」には、「石ころ」「石」「岩」「木の根っこ」などが含まれた。これらの物的対象が眼前にあったことが、当事者にとって圧倒的な心理的迫力を持ち、災害の生々しい光景の一部を構成していると思われる。そこで、災害に直接言及していると判断できる記述の中から水害で流れてきた物的対象に焦点を当てることにした。具体的には、水害により、浮かび上がってくる物、流れてくる物、水が引いた後に残された物を知覚していると判断できる箇所を抽出し、その物的対象の数をカウントした。物的対象の度数はわずかなものも多く含まれていたため、カテゴリ分類を行い、カテゴリの度数を求めることにした。記述例とともに表4に示す。カスリーン台風の体験者が知覚した物的対象のカテゴリは「流木・木材」「家・土地」「家具・道具」「死体・死人」「泥」「漂流物・がれき」「人・家畜」「石」に分類できた。度数や記述例については以降の分析と合わせて解釈することにする。

表4 物的対象のカテゴリの度数等

カテゴリ	度数	物的対象	記述例
流木・木材	19	流木, 木材, 材木, 植木, 樹木, 林木	<ul style="list-style-type: none"> 濁流が流木を共にあつという間に押し寄せてきた 流れて来る材木等を家に当たらないように突き放し
家・土地	12	家, 人家, 家屋, 屋根, 工場, 住宅, 土地	<ul style="list-style-type: none"> 周りの家がその瞬間にバタバタと流され始めた 半分くらいは土地が流され、削られて
家具・道具	10	家具, 道具, 建具, タンス, 畳, ふとん, 布切れ, 消防ポンプ	<ul style="list-style-type: none"> 道具、家具類が流れ 水嵩は増し、畳が浮き上り
死体・死人	6	死体, 死人	<ul style="list-style-type: none"> 多くの死体が流れ着き 道路は川のごとく流れており、中には死人がすごい
泥	4	泥土, 泥沼, し尿汚泥	<ul style="list-style-type: none"> 稲の穂首まで泥土が溜まり、歩行することもできない 辺り一面泥沼
漂流物・がれき	4	漂流物, がれき, 障害物	<ul style="list-style-type: none"> 濁流が上流からの漂流物を浮かべ がれきと人が重なり、山の様になっているのがあちこちに見えた
人・家畜	3	子供, 家畜	<ul style="list-style-type: none"> 子供が3、4人流れて来たのでその子供達を助け 濁流は家畜までも押し流し
石	2	石, 玉石	<ul style="list-style-type: none"> 水の瀬が強く、水面下はこぶしくらいの石が無数に足に当たり、痛くてとても歩ける状態でなかった 田、畑は荒廃し、鉈毒、し尿汚泥、玉石が露出

③直接体験データの頻出語

第三に、直接体験データ中に多く出現していた語を抽出した(表5)上位100語を目安にしたところ、4回の出現回数があった語までを採用して上位92語となった。そして、永田ら(1996)による「具象名詞」および「抽象名詞」の語が含まれているか確認した。

まず、「抽象名詞」として「濁流(41回)」「浸水(18回)」「水害(6回)」が該当した。これらの語を含む記述例は「水が合流し濁流となって氾濫し」「私宅は床上何センチか浸水しました」「そして、水害の翌日」などであった。そして、本研究のデータにおいて「抽象名詞」の語が他にあるか検討した。その結果、「決壊(9回)」が該当す

表5 直接体験データの頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
水	90	勢い	8	一緒	5
家	66	流木	8	流失	5
濁流	41	現在	8	話	5
堤防	21	午後	8	堰	4
水位	21	足	7	胸	4
前	20	家族	7	溝	4
音	19	建物	7	山	4
道路	19	工場	7	上	4
浸水	18	地区	7	声	4
流れ	14	床	6	体	4
増水	14	宅	6	柱	4
屋根	13	材木	6	店	4
川	12	死体	6	縄	4
土手	12	上流	6	門	4
床上	12	状況	6	家屋	4
避難	11	水嵩	6	近所	4
雨	10	線路	6	周囲	4
腰	10	辺り	6	状態	4
自分	10	水害	6	水勢	4
自宅	9	橋	5	台風	4
水田	9	兄	5	踏切	4
方面	9	月	5	表通り	4
決壊	9	窓	5	付近	4
流出	9	東	5	部分	4
下	8	父	5	様子	4
手	8	西側	5	一瞬	4
畳	8	南側	5	今	4
人	8	被害	5	程	4
木	8	本流	5	夜	4
裏	8	時間	5	帰宅	4
子供	8	床下	5		

ると考えられた。この語を含む記述例は「渡良瀬川堤防を決壊した濁流」などであった。当然のことながら、「決壊」が「抽象名詞」に該当すると判断するためには、永田ら（1996）において、なぜ「決壊」が含まれておらず、足利市のカスリーン台風のデータでは含まれたのかについて解釈する必要がある。長崎大水害では、主要な道路が崖崩れにより決壊し、長崎県内の死者・行方不明者299人のうち多くが土砂崩れの被害にあったといわれている（長崎市広報広聴課，2012）。それに対して、足利市のカスリーン台風は、渡良瀬川の左岸にある岩井山に取り付く十念寺堤防の決壊が最も激甚な被災をもたらしたといわれている（内閣府，2010）。前者は土砂災害による犠牲が多いのに対して、後者は川の堤防決壊による被害が大きいという違いがあると解釈すれば、本研究において「決壊」を「抽象名詞」に加えることは妥当と思われる。

次に、本研究のデータにおいて、永田ら（1996）では含まれなかった「具象名詞」の語があるか検討した。表5に示した物的対象の語について、文章での実際の使われ方を参照したところ、「流木（8回）」と「材木（6回）」が該当すると考えられた（記述例は表4参照）。これについても、長崎大水害と足利市のカスリーン台風で水害の特徴が異なることが影響したものと思われる。そして、表5に示した物的対象の語以外についても、文章での実際の使われ方を参照し、「具象名詞」の語があるか検討したところ、「腰（10回）」と「胸（4回）」が該当すると考えられた。これらの語を含む記述例は「見ているうちに、水位が私達の腰くらいに」「数歩進むごとに増す水嵩は、寺の大門に近づいた頃は胸の高さ以上だった」などであった。これらの記述は、カスリーン台風を直接体験した者が水の深さについて、自らの体の一部を使って説明していることに特徴があると判断できる。

最後に、上記までに示してきた基準で「具象名詞」と「抽象名詞」をカウントしたところ、抽象名詞の頻度が高く、具象名詞はその半数も使用されていない（表6）。この結果は、カスリー

ン台風を直接体験した者の災害イメージが主には事態的であり、部分的に事象的であることを物語っている。

表6 直接体験データにおける具象名詞と抽象名詞の度数

具象名詞	28
抽象名詞	74

6 まとめ

(1) 本研究のまとめ

本研究の目的は、水害がいかに語られるかについて明らかにすることであった。計量テキスト分析の結果からは、足利市におけるカスリーン台風の体験者にとっての災害イメージは主に事態的であり、部分的に事象的であると解釈できた。

すなわち、体験談提供者は、水害を直接体験していない人にも了解できるように語っていると考えられた。このことは、本研究の分析対象とした体験談集の「人々の記憶を辿ることで惨禍を思い起こし、次の世代に引き継ぐ」というねらいが、部分的に成功しているとも解釈できる。

しかし、部分的に事象的な災害イメージであるという結果は、体験談提供者が有している生々しい心理的迫力が抑制的に語られている可能性を示唆している。個々の事例の特殊性の多くが捨象されて語られていたとするならば、水害を直接体験していない人々がこのような体験談集を読むという行為だけでは、防災意識の硬直化につながる恐れすらあるといえる。

(2) 防災意識の維持、高揚に向けた提言

永田ら（1996）が指摘するように、防災意識の維持、高揚のためには、「事象化」した災害イメージと「事態化」した災害イメージを連動させることが必要である。以降は、カスリーン台風に限らず、今後起こりうる水害から学ぶことも視野に入れて提言をする。

①体験談提供者同士の会話も記録で残す

体験談提供者がどこにいるのか把握ができて、本人が提供する意思を持っていることまで確認ができた場合、体験談を提供する方法は様々ある。本研究の分析対象とした体験談集のように、各体験談提供者が語ったこと（書き起こしたこと）をまとめることは一般的な方法であろう。これは、体験談提供者がそれぞれ独立して自身の体験を語ったことを意味している。

また、複数の体験談提供者が一堂に会するケースもあるであろう。この場合、複数の体験談提供者とその体験談を聞きに来る参加者という構図になる。その際には、運営者が該当する災害の概要について説明（写真や映像資料がある場合にはそれらを提示）した後に、それぞれの体験談提供者が自身の体験を語り、最後に質疑応答をするという流れが最小単位であると思われる。本研究で提案したいことは、パネルディスカッションのように体験談提供者同士の会話もコンテンツに組み込み、それらの記録を残して冊子や映像等でアーカイブ化することである。

災害イメージの「事態化」の観点からすれば、体験談提供者同士の会話は、当然のことながら参加者を意識して、直接体験していない人にも了解できるように会話が進むことが予想される。一方で、災害イメージの「事象化」の観点からすれば、知覚現場における経験の共有具合によっては、知覚現場を経験していない者には理解が困難であるような語を体験談提供者同士が使いながら会話が展開される場面が発生する可能性がある。運営者は、そのような会話が続けば司会として介入し、場合によっては解説または他の話題に切り替えるかもしれない。また、編集者は、直接体験していない人には分かりにくい表現が続いていれば編集時に該当箇所を削除しようとするかもしれない。しかし、体験談提供者同士の会話は、当事者以外が災害イメージの「事象化」にアプローチできる可能性を持つ貴重な機会である。そのため、記録として残すことに一定の意味があると思われる。

②運営者が水害における「具象名詞」と「抽象名詞」の違いを知る

水害における「具象名詞」と「抽象名詞」の違いを知ることは、司会進行なども兼務する運営者にも有益なことであると思われる。体験談提供者が「抽象名詞」に該当する語を多く使ってしまふことにより、現場のリアリティが伝わりにくくなっているのではないかと運営者が危惧することは、災害をテーマとする体験談に限ったことではない。たとえば、キャリア教育科目における社会人講話などでも同様のことは起こりうる。当然のことながら、体験談提供者が話題提供する事は何であるのか、また、話題提供しない事（運営者が質問しないこと）は何であるのかについて、事前打ち合わせが必要であるが、「何が水害で流れてきたのか」「水は体のどの部位までの高さであったのか」などの質問は、体験談提供者が知覚した圧倒的な心理的迫力のある光景に近づくきっかけとなるかもしれない。

③決壊箇所の語りに焦点を当てる時間を設ける

第2節で示したように、足利市におけるカスリーン台風では、十念寺堤防の決壊による被害が深刻であった。そして、その決壊地点の付近には、地藏堂、五輪塔、シンボルタワーおよび自然災害伝承碑が建てられていた。これらの存在は、現代においても我々が決壊地点を思い起こすことを可能にしていた。

本研究では「決壊」の語が災害の下位概念にあたる名詞であると判断し、「抽象名詞」と判断した。「決壊」の語を使用しながら体験を語る際には、水害を直接体験していない人にも了解できるように語られることが多いと思われる。しかし、田澤(2020)が指摘したように、カスリーン台風で大きな被害のあった加須市の体験談提供者が「決壊口」を用いて語る事例は示唆に富む。体験談提供者が用いる「決壊口」の語は、知覚的・表象的に現存する災害の具体的内実を示す圧倒的な心理的迫力のある光景を指し示している可能性があるが、聞き手は直接体験をしていないため、個々の

事例の特殊性を了解できない可能性がある。しかし、加須市における旧大利根町の自然災害伝承碑には「決潰口跡」と書かれているため、直接体験をしていない聞き手も、「あの場所で決壊したのだ」と理解できる。このことは、「事象化」と「事態化」が共存している可能性を示唆している。そのため、往時の災害位置を確定できる自然災害伝承碑がある水害の場合、決壊地点と自然災害伝承碑の関連の知識のある参加者には、決壊箇所について圧倒的な心理的迫力のある光景を語り続ける体験談提供者の語りが防災意識の維持、高揚につながる可能性がある。

(3) 今後の課題

上記に示してきたような意義が本研究にはあると考えられるが、以下に示すような課題も残された。それは、本研究が体験談集を分析の対象としたことであり、永田ら（1996）のように当事者同士の語りのデータを収集していないことである。そのため、本研究では特に「具象名詞」の解釈については限界がある。永田ら（1996）のように、グループ分類をして、どのグループでは「具象名詞」が多く使われており、どのグループでは「具象名詞」が少ない（もしくはない）のか比較検討が必要である。しかし、この手続きが必須であるとするならば、調査者が体験談提供者に対して直接インタビューできる災害のみが研究可能ということになってしまう。

矢守（1996）は、長崎大水害を事例として、長崎新聞に掲載された水害関連記事が災害後10年間にわたって追跡し、月ごとの報道量が減少することを明らかにし、多様であった災害の意味が、人々の間で確定、共有され、ついには、今さら口にするのはばかられるほどに自明化していくことを示唆した。すなわち、災害から年月が経過すればするほど、新聞上では報道が減り、何もしなければ、直接経験のある者が語る機会も減少していくことが示唆される。そして当然のことながら、時間が経過すればするほど、体験談提供者そのものの人数は減少していく。本研究で分析の対象と

した体験談集はカスリーン台風から50年という区切りの年に発行されたものであった。おそらく発行者は、体験談提供者の記憶を辿ることができることの希少性を感じていたと思われる。災害の発生年度によるが、どの災害であっても、いつかは先達の残したアーカイブを主軸に分析するタイミングがやってくる。「惨禍を思い起こし、次の世代に引き継ぐ」ためには、先達の残したアーカイブを用いた研究の発展も一方では必要である。

注

- 1) Kathleen については、カザリン、キャスリーン、キャサリン、カスリンなどの呼び名があったが、昭和24年8月に日本語での台風の名前はカスリーンに統一されている（饒村、1997）。
- 2) 足利市総務部広報課（2017）は、このような被害記録を記載しているが「実際の被害規模は更に大きかったのではないかと考えられている」という但し書きをつけている。
- 3) 全体につき朝日新聞（1998）および国土交通省関東地方整備局渡良瀬川河川事務所（2015）参考。
- 4) 国土地理院 HP「自然災害伝承碑」参照
<https://www.gsi.go.jp/bousaichiri/denshouhi.html>（2021年2月22日アクセス）

引用文献

- 朝日新聞「カスリーン台風犠牲者を供養の地蔵堂が移転」（1998年9月15日）朝刊
- 足利市総務部広報課 2017『広報あしかがみ』No.1516.
- 建設省渡良瀬川工事事務所 1998『カスリーン災害記録集Ⅱカスリーンが語るもの聞き取り調査・体験談集』
- 国土地理院 2019『自然災害伝承碑に係る調査業務実施の手引き』
- 国土交通省関東地方整備局 HP『カスリーン台風の被害』（2021年2月22日アクセス）
<https://www.ktr.mlit.go.jp/river/bousai/>

river_bousai00000006.html

国土交通省関東地方整備局渡良瀬川河川事務所
2015『決して忘れてはならないカスリーン台風』
樋口耕一 2004「テキスト型データの計量的分析」『理論と方法』19(1), p101-115.
茨城新聞社・埼玉新聞社・上毛新聞社・下野新聞社・
千葉日報社・共同通信社（共同編集）1997『カスリーン台風：昭和22年関東水没から50年報道写真集』埼玉新聞社出版局
長崎市広報広聴課 2012『広報ながさき』No.738.
永田素彦・矢守克也 1996「災害イメージの間主観

的基盤」『実験社会心理学研究』36(2), p197-218.

内閣府 2010『1947 カスリーン台風報告書』
饒村曜 1997「カスリーン台風から50年」『気象』485, p10-16.
田澤実 2020「自然災害伝承碑と住民の防災意識：埼玉県加須市のカスリーン台風を事例にして」『生涯学習とキャリアデザイン』18(1), p67-88.
矢守克也 1996「災害の「風化」に関する基礎的研究：1982年長崎大水害を事例として」『実験社会心理学研究』36(1), p20-31.

Collective Representations of Flood Survivors Case Study of Typhoon Kathleen in Ashikaga City, Tochigi Prefecture

TAZAWA Minoru

This study investigated and clarified how flood survivors narrate stories of their disaster experiences. Previous studies have indicated two types of collective representations: those derived from shared perceptual experiences and those derived from shared conceptual propositions. We conducted a quantitative text analysis of survivors' reports of Typhoon Kathleen in Ashikaga City, Tochigi Prefecture, about their experiences. In Study 1, we analyzed the entire narration for co-occurrence

networks, and in Study 2, we analyzed noun frequencies of only passages in which survivors directly mention the disaster. The results indicated that the survivors of Typhoon Kathleen mainly developed representations derived from shared conceptual propositions and relatively few representations of shared perceptual experiences. We have discussed these results from the perspective of community disaster prevention.